

「しつけ」への絶えざる反省

成 田 錠 一



親と子の間、保育者と被保育者の間に展開されるしつけのあり

方には、本質的には差は無いと考えます。場所と構成人員の差こそあれ、それが日常生活の不断の流れの中で、絶えず成長変化する子どもを中心として、与えられ、受けとめられているものであるという意味においてです。もちろん、幼稚園、保育所の方が、現在においては、より子ども中心の生活が展開されているという事実は、標題に対して重要な意味をもっているのですが、このことは、一応伏せておくとして、以下家庭でのしつけ、保育所・幼稚園でのしつけということにとられることなく、なぜ「しつけ」に絶えざる反省が必要かということについて、私なりの考えをのべてみることにします。

問題の所在を明白にし、具体化する意味で、私のたずねた数人の、母親及び保母の意見の代表的なものを次に再録してみましょ

う。

先ず、小学二年と保育所年長児の二人の母親Aさんは、

『しつけというのは、おとな、社会人となるための必要な知識、作法を自然に覚えさせることではないでしょうか。』

『私達の子どもの頃のしつけは、親の命令に、素直に従うといった感じに受けとってきました。自分が、母親になってみましても、やはり反発を感じるものが多くあります。とやかく言われるところですが、今の子ども達の、しつかりした自己主張や、自性には明るさがあったいへん良いことだと思っています。』

『勿論、私の家にも、祖父母がありますので、しつけの考え方の違いと言いますか、遠慮するといった困ったことも出てきますが、そう言う本人が、祖父母や、私の両親が、私にしたり、言ったりしたのと同じことを、子どもにしていることがありますので、

注意しなければいけないと感じます。』

『しつけの方針といますか、どんな人間に育ててゆきたいかということについては、欲張りのようですが、科学的な眼をもつた、自己主張のできる人、自然に親しみ、夢のもてる人になって欲しいと思っています。焦らないで、じっくりと、自然の生活の中で育ててゆきたいと考えています。』

一上の子のことで、社会のテストに、「歯は一日に何回みがいたらよいか」というのがあって、子どもは「生懸命考えた末、二回と答えたら、それは間違いで、三回が正答だったというので、子どもがうかぬ顔をしていました。また道徳の時間が、一番嫌いだともうしたりしますが、私にはなんだか分るような気がしません。』

『しつけ、特に家庭でのしつけに、無関係かもしれませんが、この頃の子どもの達の中に、童謡も知らない、マンガも読んだことのない、遊び方も知らない子が増えているようですが、もっともっと母親として反省すべき点も残っているような問題だと、受けとっています。』

次に保育所保育Bさんに、保育所のしつけを中心に。

『私の受けてきたしつけも、形だけの美しくしさを強調するものであったように、思い出されます。私の感じでは、その内容をう

まく言えないのですが、現在は、日常生活の規律といますか、個人の日常生活が、快よくすこされるということが中心になると思っています。』

『私の成長してきた経験から言えば、保育所でも、家庭でも、いわゆるきびしさ、きゅうくつきが感ぜられない方が、効果的なように思われます。でも自立的なしつけは、しつかりと、健康・安全のしつけは、徹底してしつけねばならないと考えています。』

『実際に保育の仕事をしてみて、そのむずかしさと、しつけるのは、親、先生ばかりでなく、一般社会の人の協力も是非必要だということが痛感されます。』

『また手をぬくと、一度しつけたものも、とぎれがちになるということは、私達のやっているしつけの方法への反省に、大切な手がかりになると思います。ややもすれば、「しなければならぬ」と式のお題目主義になります。『どうして手を洗わなければならないのか』という点を、理解させながらといいますか、何か方向づけを、はつきりと、自分にも、子どもにも納得させての習慣化をさせれば、子どもは、その年齢なりに、よくのみこんでくれるのではないのでしょうか。』

『保育所本来の姿から言えば、生活・健康指導が、しつけの具

体的な形になると思いますが、そこには集団生活の意味が、家庭よりもより大きく、具体的に加わっていると考えます。例えば、遊びにしましても、その個人的楽しみと、それを同年令の相手も味わっていること、みんなが楽しく遊べること、このことの中に、保育所のしつけのポイントが、かくされているような気がします。個性を育てながらの集団への適応ということが、分っていないながら、子どもの条件も、子どもの生活も、子どもの喜びも無視して、無関係な、ひとりよがりな規則の押し売をしてはいないでしょうか。似て非なる社会性の名の下に、子どもの生活とはかけはなれずきたカリキュラムの押しつけ、こんなところから、私達の日頃のしつけについての、愚痴不満が、生まれることもあるのではないのでしょうか。子どもの生活、本来の遊びから、彼らなりのなっとくづくの本物の約束、規則が生まれてくるという事実を、今一度見直してみたいものです。』

次にAさんのにもBさんの発言の中にも出てこなくて、しかも最も大切だと思われるのは、子どもがそれをどう受けとめているかという点です。このことについて、先ず、考えることにします。子どもは、兄弟と友達と不公平に扱われることを極端に嫌います。母親や先生を大好きなせに、一番こわい存在だと思っています。理由なく、見当違いに叱られるのは、たいへんショッ

クです。ふくれたり、やんちゃも始めます。私達はこんな時、どうするでしょうか。ゆっくり考える、なっとくさせる話し合いのゆとりを、多忙や、繁雑を理由に、A・Bさんも反省されているように、伝統的養育法、割り切った指導法、服従の押しつけ、徳目のくりかえしにすりかえてはいないでしょうか。

子どもには、また、苦手なことも、おもしろくないことも、させられることが、多いにもかかわらず、彼らは彼らなりに、一生懸命やっております。兄や友達と比べての、ひやかしやけいべつは、何一つ子ども達を上げまじしはしれないと思います。かえてにくしみを増すだけです。しかし子どもには、母親や先生へ、そのほこ先を向けることの悪循環を、よく知っていて、兄弟や友達に手を出すことになりました。このように、子ども達が叱られるようになるプロセスや場は、子ども達にとっては、弁解するゆとりも与えられない、訳の分らないことが多く、たいていは、つまらぬことで叱られることが多いのではないのでしょうか。子どもに言わすれば、突然の来客に対する、挨拶の強要などは、いたって迷惑だし、頭から叱られるのは、もつてのほかだと言うでしょう。挨拶する場を作ってくれたらよくてできると、言うかもしれません。とにかく彼らは、おとなが介在しない自分達だけの世界だったら、たいへんうまく遊ぶことができます。

結論を出しましょう。子どもは公平に、大切にされたいのです。注意すべきは、この願いが、我々が考える以上に、きびしいものだということ。それに、両親や、先生に、服従を要求する権利はありません。この両者の触れ合いが、これらの事実が無視された時に、どのようなものであるか、容易に想像できるでしょう。このような子どもの立場をふまえた上で、Aさん、Bさんの言われる、しつけの内容について検討してみましよう。

Aさんは、「おとな、社会人となるための必要な知識、作法」といい、Bさんは、「日常生活の規律、個人の生活が、快よく過ごすことができる」と言っておられます。この内容は、子どもが絶えず変化するもの、生活の場は、簡単な固定されたものではないということから考えて、たいへんうまい表現ですが、やはり服従のおしつけ、徳目主義の危険を多分にふくんでいると考えられます。Bさんは、上手に言っておられます。個人の生活が快よく過ごされるというこのうらには、勿論社会人としての個人という意味でしょう。正しい人間関係ということでしょう。問題は、親から子へ、保育者から、被保育者へどのように伝達されるか、ということにしばられます。

年令の差には、殆んど問題なく、集団社会での規則、知識、礼儀と呼ばれるものは、それが、各メンバーによって、守られるこ

とが、要請されます。そして、それらを、私達は、家庭で、保育所・幼稚園で、一般社会で、「しつけ」という名の下に、伝達しようとしています。たいへん平凡なことですが、「なぜ社会は、集団は、その構成メンバーに、規則を守ることを要請するのか」ということ、守るものは、誰でもなく、その構成メンバー個人であること、という真の意味を、いま一度確認したいと思います。守らせるということにも、守るということにも、その規則についての、礼儀についての知識とは別に、行動することを、意味しています。この場合には、行動をともなわない知識、本物でない、見せかけの行動ではないのです。Aさんが、歯みがきの例を上げておられますが、修身が問題になっておるのも、同じことなのです。

発言の中にある、「生活の流れの中で」とか、「自然に」とか、「きゅうくつきを感じないで」という内容は、以上の如き、意味を一部暗示しております。子どもは、よく分った上で、とっております。自然に、生活の流れの中で、行動をともなう、正しい人間関係の知識、豊かな主体的な判断を人間的共感を感じせしめる、子どもの自我内容が形成されるということは、いったいどういうことなのか。繰り返すようですが、徳目主義や一方的押しつけ——叱るとか、ひやかすとかけいべつするとか、なだめすかすとかの別なく——から生れるはずがないと思います。自然の流

れの中でというのは、親と子の、子どもと保育者との、子どもと子ども、相互の信頼、権利の尊重、個人の尊厳をお互が認めあう関係の中でのみで、本物の美や、愛や、真実についての素材が、豊かに子ども達をおしつむ時に、子どもの豊かな自我——行動の主体としての——が、それこそ、自然に、きゆうくつさがなく、育ってゆくということでしょう。いみじくも、子ども達も、言っております。「友だちと遊んでいる時には、うまくゆくんだ」と。規則を守ることや、順番を待つことなどは、そこから自然に、一人ひとりの子どもの内から生れてくるのです。Bさんが言われる如く、「みんなが、楽しく遊べることに、この中に……」という反省は、このことです。いま一度、子どもの生活を、子ども本来の子ども遊びを、両親も、保育者も、見直すべきだと考えます。

また、Aさんも、Bさんも、自分達の受けてきた、しつけのあり方について、反省を感じておられながら、親と子、おとなと子どもという関係の中で、ややもすれば「しなければならぬ」式の押しつけ主義に、おちいりがちなのを警戒しておられますが、標題で、しつけを「」でかこみ、絶えざる反省といったのは、このことです。子どもの、自我内容の豊かさを、本物のしつけを、

願うならば、本質的には、両親、保育者の自我内容——めんどろぐさがあって、手をふり上げさせるのは、自我が判断し、そうさせるのです——の、豊かさに、近代化の程度に、かかっていると思えます。あらゆる美德の項目をにかけて、それを錦の御旗とふり上げたり、「子どもらしくしなさい」という一方「自分の考えは、積極的に発表しましょう」という徳目を、何の矛盾も感ぜずに、自分の心に住まわせておくような、自我の貧困に、おとなは、保育者は、絶えず、ムチうちたいものです。しかしながら、このことは、絶えざる努力が必要です。ニールのことは借りれば『初めから自律的なしつけ——本物のしつけ、「」のはずされたしつけ——が行なわれておれば、「しつけ」は必要ではない。』というところですが、このことが私達にとっては、なかなかできないものだという仮定の上で、標題の如きテーマを考えてきました。

なお、冒頭で、保育所、幼稚園の方が、標題に対して、家庭におけるよりも、より重要な意味を持っていると言ったのは、ここまで考えてくれば、お分りの如く、同じ年令の子ども同志の関係の中で、本物のしつけを、より多く生み出しうるチャンスが、多いということですが。またAさんの言われる、「近頃の子ども……」という問題は、紙面の都合で省略いたしました。別の機会にゆずりたいと思います。

（名古屋市長保育短期大学）